ウソとホント(仮)

條 夕姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウソとホント（仮）

【Ｎコード】
Ｎ３４８０Ｔ

【作者名】
條　夕姫

【あらすじ】
「魔王を倒してくれ」と１５歳にして異世界に召喚されてしまった少女は、理不尽なその国に対して憎悪の感情を抱いていた・・・のも最初の方だけ。
その国の王子に恋をして、見事恋仲になった少女は彼との穏やかな暮らしを獲得するために魔王との戦争に挑み、魔王を無事に封印することに成功した。
幸せの絶頂にいるはずの彼女だったが、もう既に身体は限界で。
「私が居なくなっても哀しまないで・・・」

彼女が意識を閉ざしかけた瞬間、視界に彼と親友が口づけを交わすシーンが飛び込んできて・・・！？

※主人公最強系です。王道を極めようと書き始めたので、「よくある設定」がうじゃうじゃ出てきます。そんでもってチートです。超チート。そんなでも良いよーって方のみ読んじゃってください（笑）

基本、コメディｗ

１月１３日、小説更新を再開しました。遅くなってしまい申し訳ありませんｏｒｚ　警告タグを一応追加しましたが、あくまで一応です。どこまでがアウトなのかがわからなかったので・・・。

＆軽くタグ変更

プロローグ（前書き）

素敵なくらいの見切り発車です。
他の小説が行き詰ってしまった為にちょっとリハビリで書き始めました。
一応ちょいちょい復活し始めてるので他小説に関しましては、もうちょい待ってくださいｏｒｚ

プロローグ

身体の中の魔力を凝縮させ、私は文字通り心血注いで封印魔法を完成させた。
目の前の魔王が悔しそうに苦悶の表情を作り上げ、呪詛の言葉を吐いてくるが、そんなものが無くても私の命は尽きる寸前だ。無意味以外の何物でもない。
後方から私の名前を呼ぶ誰かの声がするが、それに返事をする力も気力ももう私には無かった。

あぁ、これでやっと終わるのか。

そう思ったら、魔王を道連れにして死ぬのも悪くは無い事のように思えた。
この世界に召喚されて早3年。15だった私ももう18になった。
「魔王を倒してくれ」などという勝手な理由で私を召喚した他力本願な異世界の国に抵抗していた最初の頃を思い出す。
なんでこんな国の為に！と心底思ったものだ。

・・・・でも、私は恋をしたんだ。

全てを捨てても良いと思えるような恋を。
その人を守るために、彼を生かす為に私は一生懸命、戦った。
彼と恋人同士という甘い関係になってからは、彼と共に生きる為に、平和な世界を作る為に、戦った。

でも、平和な「日本」という国で15年間生きていた私だ。

「恋の為」という感情だけでは戦場はあまりにも辛すぎた。
戦って、命を奪って奪われて。疲弊していった私はやっとのことで今日を迎えられたのだ。

「魔王の封印」

これを成せば、きっと幸せになれると思っていた。
やっと穏やかに彼と生活できると。
・・・・でも現実はそんなに甘くなくて。
強大な力を持つ魔王を封印する為に私は全力を注いで、もはや身体は空っぽ状態だった。

あーあ、私、死んじゃいそう

そんな虚脱感が身体を包む。
彼と共に過ごしたかった。
彼と共に生きたかった。
なのに、その願いは叶いそうもないのだ。残念すぎる。

泣かないで
哀しまないで

私が死んでも貴方は幸せになって・・・・

そう思いながら力が抜けていくのに抵抗せずに瞼を閉じようとしたところで私は見た。

見てしまった。

封印魔法の影響で出来たクレーターの淵で

私が恋した彼と
この異世界での唯一の親友と呼べるような存在の彼女が

寄り添い、口づけあっているのを。

プロローグ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
誤字脱字などにお気づきになられた場合は、是非教えていただけると嬉しいですｗｗ

連続投稿します。

おはようございまーす（前書き）

※読んでいただけたら分かると思いますが、基本この小説はコメディで構成されております※

平成２４年１月１３日
後書きに後日談を付け足しました

おはようございまーす

「ふざけんなーーーーーー！！！」

大きな叫び声に覚醒を促され、私はガバリ！と飛び起きた。
あぁ、なんて恥ずかしい。自分の寝言で目が覚めるなんて！

目が覚めると一番最初に飛び込んできたのは、薄暗い天井だった。
鍾乳洞のような印象で氷柱のように水晶のような鉱石が沢山ぶら下がっている。
見覚えのない光景に、？と首をかしげつつグルリと辺りを見渡すと、自分が洞窟の中の浅い泉の中に横たわっていたことが分かった。

あれ？どうしてこんなとこに私いるの？？？

眉間にしわを寄せて考えて見るが答えは出ない。
記憶を辿ろうにも、さっきの夢だか現実だか分からない腹立たしい映像が頭の中にちらついていてどうにも集中できそうにないのだ。

あぁ、クソ。夢にしてもリアルすぎだ。
彼は誠実で優しかったし「君は大切な人だ」と言ってくれてたじゃないか。私が疑ってどうする！
私に愛をささやいてくれた堅実な彼に失礼だ。と映像を振り払うように頭を振って私は、年頃の女の子とは思えないような掛け声とともに立ち上がる。
つまりは、「どっこいしょ」な訳だけど。

立ち上がると、ポタポタと服から雫が垂れ落ちる。
日本に居たころは黒かった、今は真っ白な髪も泉の水によって濡れ

そぼっていてまさに今の姿はぬれ鼠という言葉が相応しい。
肌に張り付く服が不愉快で乾かしたくはあったけど、魔力(マナ)の全く感じられない洞窟内ではそれは出来そうにもない。深く溜息をつきつつ、私はゆっくりとした足取りで洞窟の中を歩き始めた。
足元はツルツルの水晶でペタペタと反響する足音はどこまでも響いていって、いまいる洞窟がせまくは無い事を教えてくれる。
しばらく無言で洞窟内を徘徊し、わかれ道など無い道をどこまでも歩いていると遠くに光が差し込んできている場所を見つけた。

どうやら出口らしい。

ホッとしつつ、少し早足になりながら出口から抜け出る。
薄暗い洞窟内に目が慣れていたおかげで、外に出ると目がチカチカする。
瞼を下ろしてしばらく光になれるのを待ち、それに慣れたころ私はゆっくりと瞼を持ち上げ

「・・・・・は??」

硬直した。
洞窟の出口は切り立った崖のちょうど中ほどにあったらしい。
狭い足場から軽く身を乗り出せば目が眩むような高さだった。
地面は物凄く遠い。孤立無援。というか、ホントに何処だここは。

唖然としつつとりあえずは濡れた服と髪を乾かそうと視線を巡らせて、空中に漂う魔力(マナ)を使用しようとすると突然ふわりと風が吹いた。
優しく包み込むような風は一瞬で私から水気を飛ばし、くるりと空中に形を作る。

『姫様、おかえりなさい！』

『姫様、おはよう！』

口々にそう語りかけてくるのは水色の小鳥を象った風の精霊達。
嬉しそうに歓喜の声を上げるそれらに私は苦笑しつつ「おはよう」と返しつつも内心では驚きを禁じえなかった。

異世界トリップの王道というか、私は素晴らしくチートなのだ。
神や精霊、動物たちに愛される体質で、日本に居た時と比べると見目も随分と美しくなっている。
自分で言うのものなんだけど、あれだ。絶世の美女ってやつ？？

雪のように白い髪は微かに銀色を帯びていて艶やかで、瞳は海のような蒼穹色。
手入れなんて必要ない程に澄んだ肌は日焼けなど知らないというような真っ白さで、ともすれば不健康そうに見えると言うのに、そんな危うさなど感じさせない清潔さを持っている。
最初、自分の姿を見たときは受け入れられなかったが数週間もすれば慣れた。もう鏡を見ても驚かないし、お風呂の時も普通に洗える。
・・・・うん、最初は直視できなかったんだよ。自分の身体なのにね。

まぁ、そんなことは置いといて。
そんな異世界トリップの王道中の王道な目にあった私には、チート能力がこれほどか！という程に詰め込まれていた。
で一つ目が、精霊魔法が対価なしでほぼ無限に使える・・・ということ。
精霊に愛され体質な私は、普通の人たちが使うような長ったらしいお伺いの呪文なんてものが無くても精霊魔法が使える。
・・・というよりも、精霊達が勝手に私の意を汲んでイロイロとやってくれちゃうのだ。

寒いな～と思えば火の精霊達が温めてくれるし、暗いな～と思えば光の精霊が明かりを灯してくれる。

果ては、コイツ気に食わない！と思えば闇の精霊がソイツを闇の中に引きずり込んでくれたり・・・とかね??

勿論、そんなことは望んでいないと懇切丁寧に闇の精霊に説明して吐き出して貰いましたけれども。

そんなこんなもあったりしたので精霊達に愛され体質な私にとって、風の精霊達が現れた事はそんなに驚くような事ではなかった。というよりもコレは日常の出来事だ。

精霊と私。それは常に一緒に居るものなのだから、驚くことなんてない。

なかった・・・・のだが、問題はそこでは無い。

現れた風の精霊達の数が尋常ではなかったのだ。

空中に無数という水色の小鳥が飛んでいるんだ。流石に驚くよ、こりゃ。

いつもなら私の願望を聞いて（勝手に）願いを叶えようとして現れるのは2～3匹（匹?）だけ。

精霊達の話によると、あんまり大勢で来ると姫様（精霊達は私を姫と呼ぶ）に迷惑がかかるので順番を決めてそれで来てるんだとか。

だから、こんなにも大量の風の精霊を見るのは初めての事だった。

視界を埋め尽くすように鳥、鳥、鳥、鳥。

サイズはみんなバラバラで、水色と一言で言いはしてもその色は様々だ。

あぁ、綺麗な鳥たちを表現する語彙の少ない私の残念な頭が恨めしくてしょうがない。

一際身体の大きな鳥が群れの中から目の前に進み出てくるのをぼんやりと見ながら私はそんなことを頭の中で考えていた。
現実逃避だ。分かってる。だけど、私には全くもって今の状況が分かってないのだから、これくらいさせてくれても良いと思う。

イメージ的には水色のフェニックスと言ったところか。
彼は私の元までくると、くるくると喉を鳴らしながら

『ようやくお目覚めなのですね。』
そう、言った。
優しい声は記憶にあるものと全く変わらずにあって、私は安堵から思わず肩の力を抜く。

「えーっと、・・・・・おはよう？」

なんと言えば良いのかが分からなくて思わず間抜けな返答が口をついて出た。
というか、ねぇ、私寝てたの？

つらつらとそんなことを考えていたら、風の精霊神であるブラストは呆れたように器用に肩を竦めて私の頭の上に着地（着頭？）する。
精霊だからなのか重さは０。肩は凝らないと思う。

『何も覚えていないのですね』

覗き込んで来るブラストにコクリと頷いた私の頭の中にはずっと、何がどうしてこんなところに？といった疑問がグルグルと渦巻いている。

『魔王を封印した直後、姫と魔王は姿を消したのですよ。全く覚えていないのですか？あの戦場に封印魔法の影響で出来たクレーターだけを残して姫は忽然と消えたのです。我ら精霊は姫が生きている事を信じて探し続け、やっとの事でこの洞窟で眠る姫を見つけずっと守護をしつづけていたのですよ。』

あぁー・・・、魔王との戦闘は夢じゃなく本当にあったのか。。

・・・うん？？

ってことは？？

『あぁ、ちなみに姫が行方不明になった数日後にクリスはローズと結婚しましたよ。子供が3人出来て順風満帆な日々を過ごしてましたね、確か。まぁ姫の事を散々利用した上に幸せになろうとしていたのに腹を立てたフレイムが国ごと滅ぼしましたから、今はもうその子孫も残っていませんが。』

・・・夢じゃなかった・・・・とな？

・・・・・・・・・・・イッタイドウイウコト？？？

なんでクリスはローズと結婚したの？しかも私がいなくなった数日後って・・・なに？

つまりは、あの夢は夢じゃなかったってこと？

いつからローズと恋仲になってたの？
いつからローズは私を裏切ってたの？

アノコトバト、アノエガオハ・・・ウソ？？

サアッ・・・と血の気が引いていくようだった。
あまりの衝撃にもう、頭が真っ白だ。
問い詰めたくても、火の精霊神であるフレイムが先に滅ぼしてしまったらしい。
いや、まぁ、話聞いたら私もぶちギレてそれくらいはやりそうだけど、余計なおせっかいではある。私にぶん殴らせろ、と言いたい。

『更にちなみに。フレイムを擁護する訳ではありませんが、滅ぼさなくとも姫は５００年という人には長い時を眠り続けていたので例えフレイムが滅ぼさなくとも少なくともあの２人が生きて再び姫と会う事は無かったでしょうね。フレイムとダークは事の詳細を知っているらしいので詳しい話は２人に聞けばいいでしょう』

・・・・・・前言撤回。フレイム、よくやった。
詳しい話は今度聞くにしても、なんか私の勘が告げているのだ。胸糞悪い話ダゾ☆とね。
ならばお礼こそ言えても恨み事などフレイムには言えまい。そう思うくらいには私、お腹の中黒いからね。

というか私５００年も寝てたのかー。実年齢５１８歳？お婆ちゃんにも程があるだろう。

「まぁ、クリスの事は後ででいいや。腹立つから今は考えたくないし。・・・とりあえず、ここ何所か分かる？」

『ここはアウェイズの森の一角です。』

人間誰しも切り替えが大事だよね。混乱のしすぎでショートしたとも言うけど。
ブラストの言葉になるほど、崖の下に見えたあの森はアウェイズの森だったのかと納得。
アウェイズの森とは、私が召喚されたベリオ王国からだいぶ離れた場所だ。
一度だけ。たった一度だけ魔王討伐の旅の途中で立ち寄った事のある森で、神と精霊の住まう神聖な森。
あの時は、神に愛され（以下略）のお陰で大変な目にあったのだがまぁそんなことは今は問題ではない。
それにしても、アウェイズの森は確か戦場から大分離れた場所にあったはずだ。
私の記憶が正しければベリオ王国を挟んだ正反対にある場所なハズ。

あ、何で魔王討伐の旅の途中でそんな場所に行ったのかは今は割愛させていただくわね。いつか語る事もあると思うし。

とにもかくにも。何で私はこんなトコに？？
ブラストは私のその質問には『すぐに分かりますよ』と言うだけで教えてはくれなかった。
このいじわるめ。

『ひとまずは、下に降りましょうか。皆も一先ず下がりなさい。そろそろ姫に会えない鬱憤で爆発しそうな他の精霊神がいることですしね』

ブラストはそういうとバサリと翼を羽ばたかせて風を起こし、私の身体をふわりと浮かばせた。
風の精霊達は多少不満そうにしながらも口々に『姫様、またね』『何かあったら呼んで』『なにも無くても呼んで』と囁いて風にその姿を溶かしていく。
おい、最後の言ったの誰だ。何の用もないのに呼ぶってどんな状況か１０文字で私に説明しなさい。

「うん、みんなまたねー」

精霊達の姦しい声にばいばいと手を振った私は、皆が風に溶けたのを確認するとブラストの精霊魔法で起こされた風に乗って数十メートルという高さのある足場から飛び降りた。
危なげなく着地して思わず体操選手のようにポーズを決めてから、ハッ・・・と気付けば案の定ブラストが変なものを見るような目を私に向けていた。
は・・・・・恥ずかしいっ！

日本にいた頃はこれをやるとノリの良い友達が「わー」と心の伴わない歓声と拍手をくれたものだが、こちらではポーズの意味が通じないので頭の中を心配されてしまうのだ。
私は正常だ！！！と訴えるがそれすらも哀れむような目で見つめられ、いたたまれなさに私はぐっ・・・・と唸る。

「いっ・・・・今のはねっ、私のいた世界では意味のあるポーズで『そんなのはどうでもいいですから他の精霊神を呼んでください。暴走寸前ですので』」

言い訳のようにポーズについて説明をしようとしたらバッサリと切られました。
えぇ、それはもうバッサリと。
頼むよ、弁解くらいさせてくれと言いたいところだが暴走寸前という聞き捨てならない言葉に私はその心の声を無理矢理飲み込んだ。

頭の中が残念な子だと勘違いされるのと、この世界の崩壊阻止だったら優先すべくは勿論・・・・・・

勿論・・・・世界の崩壊の阻・・・・って、あれ？よく考えてみたら私、別にこの世界壊されても困んなくね？むしろ清々するカモ？

超ブラックな思考が頭の中を一瞬過ぎったが、微かに残る良心で心惹かれるその案を宇宙の彼方に放り投げておく。
やろうと思えばいつでもやれるのだ。本気でぶちギレた時の為にその手段は取っておこうと思う。

「ダーク、レイ、シー、フレイム、ライト、グラン。みんな来てー」

なんとも間の抜けた召喚方法もあったものだと昔、笑ったのは一体誰だったか。
精霊に愛され（以下略）な私にとって召喚魔法なんてあってないようなものだと確かその時は反論した気がする。
だって皆勝手に来るんだから。

でも精霊神達は例外で、彼らは昔私とした約束に従って勝手に出てくるということを絶対にしない。
それは『呼ばれないと出て来ない』という一方的な約束。
彼らは一様に過保護で、常に7人（さっきブラストが人って言って

たので匹から変更。なんか今更な気もするけど）の精霊神が共にあろうとするのに呆れた私が無理矢理結ばせた約束だった。
それを律儀に守っているのだ。ただの口約束なのにみんな、真面目ねーと思ってしまったのは内緒だ。

精霊ってこういうところがやっぱり良いと思う。
みんな思いやりがあって優しいし、人間とは違って誠実だ。まぁ、私限定で、だけど。

私の呼びかけに空気がぐらりと揺らぎ、一瞬で目の前に６ひ・・・・・失礼、６人の精霊が現れた。

おはようございまーす（後書き）

～後日談～

姫「そういえば、あのときなんでブラストあそこにいたの？」

ブ『姫が心配だったからに決まっているでしょう』

姫「でも約束守って皆私が呼ぶまで出てこなかったじゃない？なんでブラストだけあそこにいたの？」

ブ『……』

姫「もしかして、皆ちょくちょく約束破って出てきてた……とかそんなことは」

ブ『……』

姫「……あるんだね」

ブ『（コクン）』

姫とブラストの後日談。

長くなりそうだったので切りました。

続きは早ければ明日・・・かなぁ??

矛盾点が見つかった為、軽く訂正しました。（5月25日）

・・・・お久しぶりです？（前書き）

お気に入り登録されている数と閲覧数が小説のページ数と比べると凄い事になってて（，・ω・、 o）ナゼニ？とか思ってたらまさかの日間ランキングの１７位とか１９位とかの位置にいたというｗｗｗ
だれかこの状況を詳しく私に説明してくれｗｗ

主人公的には、眠りにつく前のことは昨日のコトなのに周りにとっては５００年ぶりの再会ｗｗ

・・・・お久しぶりです？

さて、一人ずつの特徴を説明するわね。

ダーク→闇の精霊神
見た目はグリフォンに似てる感じ。
まぁ、全身これでもかってくらい真っ黒なんだけど。

レイ→光の精霊神
見た目はもろペガサス。羽生えた白馬だよ、白馬。
真っ白で、額には透明な円錐形の角がある。

シー→水の精霊神
見た目は青い大蛇。
海みたいな蒼色で、背中には背びれみたいなのがあって、水陸どっちでも生活可能・・・らしい

フレイム→火の精霊神
見た目は深紅の虎って感じ。
乱暴で喋り方はヤンキーっぽいけど、凄い気が利く子。

ライト→雷の精霊神
見た目は大きな狐っぽい感じ。ふわふわな尻尾がお気に入りデス
でも中身は子供（ガキンチョ）。

グラン→大地の精霊神
見た目は熊。おっきな熊。大きな肉球は愛すべきものです。

ちなみに、言うとシー以外はみーんな男。
まあ、精霊に性別なんてあって無い様なものだから性格とか声質とかに限った話・・・なんだけど。
ちなみに人型にもなれるんだけど、私が動物大好きだからか皆意識して動物の姿をしている事が多い。
一回、「なんであんまり人型にならないの？」と試しに聞いてみたら『そっちの方が姫が抱きついてきてくれるから』と言われて二の句が継げなくなった。
いや、体格の良い見た目イケメン成人男性に（女性体のシーと子供体のライトにはよく抱きついてたんだけど）可憐な乙女がおいそれと抱きつく訳にはいかないでしょう？と心の中で反論してしまった私は絶対に間違ってはいないはず。
まぁそんな理由で、動物姿になるよう心がけ始めたシーとライト以外に私が心奪われ、抱きつかれなくなったシーとライトがそれに嫉妬してつられるように・・・・と今のような状況に至っている。
私に言わせれば実にくだらないのだが、精霊神達にとってはとても大事なことらしい。

・・・・閑話休題。ちょっと長くなったけど。
目の前にズラリと並んだメンツに私は呑気に「やっほー」と手を上げた。
私からすればちょっと前まで一緒に戦場で戦っていた感覚なんだけど、皆からすれば会うのは５００年ぶり。
精霊の生の長さから考えればたった５００年・・・のはずなんだけど、なんだろう。皆目が怖いよ・・・。

『・・・姫、やっと目が覚めたのか』

『心配したよ、体調は大丈夫？』

『ひーちゃん、心配したわよー！！』

『たっく、寝すぎだっつーの』

『起きんのおっせーよ！こんの、寝ぼすけめ！！』

『心配したぞ、姫。もう大丈夫なのか！？』

順にダーク、レイ、シー、フレイム、ライト、グランだ。ブラストは沈黙を貫いている。

よしよしと大きな手（前足？）で頭を撫でてくるダークに、「え、あれ、皆結構マジで涙目？」と私はうろたえる。

ツンデレ性質のあるライトですら涙目なのだ。随分と心配をかけてしまったようだと不可抗力とは言え５００年も眠っていた自分を反省する。

・・・・するよ。うん。反省するする。

だから、６人全員で説教するのはやめてちょうだい！！！

再会を喜ぶ言葉から一転、いつのまにか『あんな国の為に・・・』とか『あんな男の為に・・・』とか『あんな危険な魔法使うなんて

無茶を・・・』とか寄ってたかって説教をし始めたのだ。
ぐちぐち言われる責め句に流石に罪悪感も薄れてくるってもんだ。
五月蠅い、黙れ。とまでは言わないけどさ。ちょっと、しつこくない？？

「心配・・・かけてごめんね？？」

あまりの口五月蠅さにうんざりしてきた私は意識して可愛らしく小首を傾げて儚く微笑んだ。全員がグッ・・・と詰まりこむ。
秘儀、儚い美少女スマイル！！
・・・・ネーミングセンスが無い事についてはスルーでよろしく。
うん。
7人全員、みんなして基本的に私には甘甘なのだ。ちょろいちょろい。
言葉を無理矢理呑み込んだ風な精霊神達に私は、殊更分かりやすくシュンッ・・・と項垂れてみせる。

ふふっ、私は女優なのよ！演技なんてちょろ・・・・・・ちょろ・・・・・あれっ？
・・・・・えーっと？？
みんないつの間に人型になったの・・・カナ？？？？

「姫、泣くな」

「ごめんね、言いすぎた」

「ひーちゃん、ひーちゃん！！泣かないでぇ～」

「おわっ、姫、ごめん！」

「なっ・・・何泣いてんだよ！！」

「ごめんよ、姫。頼むから泣かないでくれ」

「あーあ、泣いてしまったじゃないですか。勢いよく迫りすぎですよ」

いや・・・泣いてないし。

今まで沈黙を守っていたブラストまでが、無責任にもそんな事を言って煽るから更に慌てる面々。いや、ていうか何故にブラストまでもが人型にｗｗ

なんかものすごーく顔を上げづらい状況になってしまった。

壊れ物を扱うかのような優しい力で私を抱きしめてくるダークの胸に額をグリグリと圧しつけて、私は顔を隠す。

説教から逃れることには成功したが、次に来たのは慰めの嵐。

すんません、演技でした。とは言いだせない皆の心配そうな声に罪悪感がグサグサッと胸に突き刺さってくる。

そうでした、みんなこんな子でした。と最近（私にとっては）の殺伐とした空気の中で忘れていた事を思い出す。

思わず遠い目をしてしまったのは誰にも責められないだろう。

○

ダークの胸の中で慰めの嵐とグサグサ突き刺さる罪悪感に耐え抜いた私は今、アウェイズの森を歩いている。

７人の精霊神を引きつれて歩くのは本意ではなかったけど、誰か１

人を残して他の全員を精霊界に戻そうとすると森が滅びそうだったので諦めた。
本気でお互いに殺意を飛ばしてるもんだから、流石の私も空気を読む。

目的地は、アウェイズの森の最奥部。
レディーシアという女神が宿る大樹のある場所だ。
私が眠っていた洞窟のあった崖もなかなかに森の奥深い場所にあったらしく、歩くのは苦ではない。
裸足なのでたまに小石を踏むと軽く痛みがあったが、魔法で保護してあるので怪我をすることもない。

『姫、歩かずとも私たちの背中に乗ればすぐに着くんだぞ？』
『そうだぞ。遠慮する必要は無い』
『その短い脚でちょろちょろ歩いてたら次の日になっちまうぜ』

等と五月蠅い外野がいるが、こいつらの背中に乗るとちょっと厄介な事になりそうだったので丁重に遠慮させて頂いた。
理由はいろいろとあるけど、ここでは割愛。これも今度詳しく話す機会があるでしょう。
小さく歌を口ずさみながら（勿論選曲はト〇ロだ）、私は森の中を歩き進める。
目印なんて無い木ばっかりの場所だが、迷うことは決してない。
なんでって、そりゃあ

『こっちよー！姫ちゃん、こっちこっちー！！！！！』

という盛大な呼び声が森の奥から響いているからだ。
あぁ、なんて神聖さとかを丸ごと無視したような声だろうか。
これが人々に「慈愛と美の神」と呼ばれる神かと思うと頭痛のする

思いだ。

「レディ、五月蠅い・・・」

米神に指を当てて深い溜息をつきながらも声を頼りに歩いていると、唐突に視界が開け、目の前には空に届いているんじゃないかと疑ってしまうくらいに大きな樹が鎮座している広場に到着した。

『キャーッ！！相変わらず可愛いわね、姫ちゃん！！心配したのよお？？？』

駆け寄ってくるのは、緑色の髪の美人。

彼女こそが先ほどの大声の主で、「慈愛と美の神」などと私からすれば「分不相応すぎるだろう」と言う印象な二つ名を持つ女神様だ。

ここに来る途中で軽く精霊神７人衆に聞いたところ、魔王封印後に魔力（マナ）となって空気中に溶けて消滅しそうになった私をレディがかき集めてくれたんだとか。

でレディは、私を一人占めできるようにと心配性な精霊神達に私が無事な事を秘密にしたまま、私が眠れるようにと静かな洞窟に寝かせて５００年守り続けてくれたらしい。

いや、突っ込みどころがいろいろとありすぎてアレなんですけど。

しかもそれを意地で見つけ出した精霊達も凄いと思う。割かし本気でレディは私を隠そうとしたらしいし。

「レディ、助けてくれたんだってね。ありがとう」

『姫ちゃんがいなくなるなんて嫌だったんだもの！ジェイルとキルアも手伝ってくれたのよ！』

ジェイルは生命を司る神で、キルアは運命を司る神。最高神と呼ば

れるそうそうたるメンバーに心底呆れてしまう。
なんていうか、ホント規格外だな、自分。と思わずにはいられないのだ。
それもこれも神に愛（以下略）・・・・いい加減略すのも面倒になってきたな・・・。

・・・・お久しぶりです？（後書き）

読んでくださりありがとうございました♪
そんでもって更新遅れてすいませんでしたｏｒｚ
次の話は早めにうｐ出来るように頑張りまするｗｗ

誤字脱字、文章の矛盾点などに気付かれた場合は是非ご指摘くださいませ

ちなみに未だに主人公の名前が出て来て無いのはただ単に名前が決まってないかｒｙ・・・・げふんげふん

そして早速手直し
内容的にはあんまり変わってません
１３：３６手直し完了

女神様って意外とこんなもんです。（前書き）

超短いです・・・・
上手く区切れない私のミスｏｒｚ

次話を今日中に更新出来るように頑張りますのでご容赦ください；；

女神様って意外とこんなもんです。

大樹の太い根っこに腰かけてレディの話を聞いていた私は、ふむ。と顎に手を当てた。
レディ曰く、５００年経って随分と人の世は変わったんだとか。
まず大きく変わったところは、人が精霊魔法を使えなくなった所にある。
これについては聞いた瞬間に「やっぱりか」という感情しか生まれなかった。
私ＬＯＶＥな精霊達が、私を散々利用した人間に力を貸す訳が無いのだから。

で、精霊達と同様に神と聖獣達も人間に力を貸すような事をほぼしなくなったんだとか。
これも精霊達と同様の理由なんだってさ。
義務的事はやるが、過剰な恵みを与えなくなったらしい。
本当は何もしてやりたくないんだけどというのが本音。でも世界神ゼロフトがそれはさすがに・・・と渋ったらしい。
不満そうにそう語るレディに「そうかいそうかい」と適当に空返事を返しつつ私は唸る。

ということは、だ。
前々からチートだったというのに、今は更にチートな訳だよね？私って。
神様と精霊と聖獣全部が味方で人間が使えなくなった精霊魔法も使用可で、魔力（マナ）許容量が無限大。つまりは魔法も精霊魔法もいろいろと使い放題。
・・・え、もうこれって人間って言えなくない？？

試しに火よ灯れーと心の中で念じてみたらポッと人差し指の先に小さな火が灯った。
見れば、嬉しそうに私の指先に火を灯しているのはどこかから現れた名も無い小さな火の精霊。
フレイムは自らの眷族を羨ましそうに見ている。
・・・おい、何自分の眷族に嫉妬してやがる。

精霊に「ありがとう」と微笑んでお礼をいってから私は、更にふむ。と唸る。
精霊魔法は使える。まぁ、ブラスト達が今一緒に居る時点で使えない訳が無いのだけれど一応の確認もおっけー。

他に変わったところは？と尋ねた私にレディは『いっぱいあるわよー。上げ出したらキリが無いくらいには』とあっけらかんと笑って見せる。
この世界と人間に興味は無いけれど、生きていくためにはこの森の奥深くにずっと引っ込んでいる訳にもいかないだろう。
なにしろ私は科学技術の進んだ先進国、日本に生まれた現代っ子なのだ。
森の中で原始的な生活・・・・なんて御免こうむりたい。
精霊達がいれば森の中でも楽で最上級の生活は出来るだろうけどヒモ生活なんてのもまっぴらごめんだ。
私は私の力で稼いで精いっぱい贅沢したいのだ。

悩んでいる時間は数秒だった。

うん、森、出ようか

なんて簡単に結論を出した私は必死に引きとめようと暑苦しく懇願するレディを文字通り足蹴にして（レディはドMなので滅茶苦茶喜んでいた。キモイ）、召喚魔法を発動させる。
これまた何の問題もなく発動した魔法によって喚び出されたのは、リオルと私が名付けた強大な力を誇る始祖ドラゴンという種族の生き物だ。
真珠のように七色に輝く純白な色の鱗の西洋風ドラゴンのリオルは、私専用のアッシー君第一号。
始祖ドラゴンは気高く誇り高いので普通は人を背中に乗せたりしないのだが、言わずもがな私は例外中の例外。
ちなみに精霊神達の背中に乗らないのもこのリオル君が理由だったりする。
私専用のアッシー君達は、自分達以外に私が乗るのを決して良しとはしない。
寧ろ、全面戦争を勃発しようとするくらいには嫉妬心をむき出しにするのだ。

一回、ダークの背中に乗せてもらった時はリオルと陸上用アッシー君こと銀狼のルガが激怒して森一つが吹っ飛んだことがあった。
なまじお互いが強大な力を持っていてプライドも天に届く程に高いもんだからどちらかが滅ぶまではやめない・・・と灼熱してて、私が「やめないと二度と口利かない」というアレな発言を言い渡したことによってやっとお開きとなった。
あの時は弟妹の喧嘩を仲裁してやってる気分だったわ。
生きた歳月からすれば大分私よりも年上なハズなんだけど、なんでかな？年上の威厳とか感じた事一切ないわ、私。

―クルル・・・・―

頭を下げて私にすりすりとすり寄ってくるリオルの頭をヨシヨシと撫でてやってから私は、私の足元でハァハァいっていたレディを渾身の力で蹴り飛ばした。
森の中の木をなぎ倒しながら吹っ飛んでいくレディを尻目に、戻ってくる前にとっとと移動してしまえとリオルの背中に飛び乗る。
飛べない精霊神組（シー・フレイム・ライト・グラン）も同じようにリオルの背中に飛び乗り、飛べる組（ブラスト・ダーク・レイ）とリオルはバサリとそれぞれ翼を広げる。

爽やかな風が吹く中、静かな旅立ちに私は唇をキュッと噛みしめた。

今度は、人間なんかに心奪われたりしない。
私は私の為だけに生きてやるんだから。

そう密かに心に決めて、飛び立つ合図としてリオルの背中をポンポンポンと三回叩いた。

『まってぇぇぇぇぇ！私も一緒にいいいいいいいい！！！！』

早々に復活したらしいレディの声が響いたがをそれを軽やかにスルーして、私たちは旅に出た。

女神様って意外とこんなもんです。（後書き）

・・・・・・・・短くてすんませんｏｒｚ
そんでもって、急ぎでのうｐなので、多分手直し入ります（，・ｘ・）

一部手直し　１．１３
ゼロフトを創造神から世界神に変更しました
文章に誤りがあったので訂正しまきた

逃げるが勝ちってホントかな（前書き）

まず最初に言わせてください
ごめんなさい！
と↑

次話投稿が今日ってどういうこと??と自分でも思わなくもないんですが・・・・・
これ以上言ってもただの言い訳ですね。ホント更新遅れて申し訳ないです；；；；

逃げるが勝ちってホントかな

「リオル、お疲れ様ー。ありがとねー」

―キュウン―

アウェイズの森近くの村まで飛んでくれたリオルを還して（どこに還るのかを私は知らない。）、私はいま仁王立ちで立っている。
目の前にはボロボロになった7人の精霊神達。
ここに来るまで、いろいろとあったのだ。
そう、いろいろと・・・・・・・あ、思わず涙が。

今までの苦労を思い出すと心が荒む。
なんで森から街まで移動する短い時間の中でこんなに苦労をしなきゃいけないのか。
ほんと、私が一体何をしたって言うんだ。

「ほんっと、良い迷惑。新しく約束作ろうか？？？」

そう脅す私に怯える面々。
私の目の前にシュンッと俯く7人の更に向こう側に見えるモノに私は更にピキッ・・・と額に怒りマークを浮かばせる。

そこには、村がある。人間が住む名も無い小さな村だ。
私の知る世界は今より５００年前だから、この村の事など勿論私は知らない。訪れた事も無い。
だからこの村の人も私の事など知らないだろう。知る訳が無い。

な　の　に

何故か村のど真ん中に彫像があるのだ。
精巧な、人の手では到底造れないような私……そっくりな淡い水色の彫像が。
なんだこれは。と硬直する私を置いて、盛り上がる面々。
曰く

『この村を担当したのは私なの！姫そっくりで綺麗でしょ！？』

『いや、俺が作ったあの国の彫像の方が姫に似て可憐で美しい！』

『そんなことない、俺が作ったあの彫像が一番姫の清廉さを表せている』

云々。
愕然とする私を置いて果ては『誰が作った彫像が一番か』等と論争し始める始末なのだ。
・・・おい、ちょっと待て。これは何の嫌がらせだ。
と突っ込む隙すらない。というか、突っ込む気力すらない。

この場では唯一の味方であるリオルが「真っ白」というリアル彫像と化していた私を突っつく事で正気に戻してくれたが。
で、ぶちギレた私が魔法を発動し、冒頭に戻る訳だ。

この彫像を私が発見する前にも移動中、イライラボルテージが上が

る要素が色々とあった為にもうホント大爆発って感じで上級魔法が炸裂して。
魔法は精霊神をボロボロにしてくれたんだけど、それでも私の腹の虫はおさまらない。

ふざけるのも大概にしろ。
何が楽しくてこんな羞恥プレイに耐えなければならないのか。
しかも、何？あらゆる村や国という場所にこれがあるって？？？

死　ん　で　く　れ

死刑だ。精霊に死は無い？
ふふっ、そんなん知らん。私が引導を渡してやんよ？？？
殺気満載で微笑む私にビビる精霊神。・・・シュールだ。

「クソ馬鹿共めが。いい？？あの像、それぞれが責任を持って破壊してきなさい」

「そんな！！！全部良い出来なのよ！？」

「姫、そんなこと言うなって。全部姫にそっくりで快心の出来な」

「じゃかわしい！！！グダグダ言わずにとっとと行け！！！」

悲痛な声を上げるシーとフレイムが抗議の声を上げてくるが、そんなのは知った事ではない。
むしろ、快心の出来なのが問題だと私の心の中は暴風が吹き荒れる。
なおも彫像の良さについて言い募ろうとするやつらに風の魔法を発動してそれぞれを吹っ飛ばすと全員が逃げるようにして去って行った。

「ごめんなさーい！」と風の中に謝罪の声が聞こえた気がしたがそんなもんは価値が無い。
行動で示せ、行動で。
この阿呆共め。
フンッ。と鼻で荒く息を吐いた私は、ふと視線を感じて振りかえった。
そこには5人くらいの冒険者らしき人々。

やっべ

みられてた☆

○

精霊達曰く、今の時代の人たちは精霊が見えない・・・らしい。
恩恵に見放された人間達は、精霊や神々を信仰をする者は少なくなり、よって見る力を持つ者もほぼいない。
精霊魔法が使えなくなり、後は退化するだけ・・・という現状に慌てている人類にとって今は魔法だけが頼りの綱云々と確かレディも言っていた。

まぁ、つまりは何が言いたいかと言うと。

問題はこの人たちにとって今の私と精霊神達の会話がどう見えるかという事なのだ。

私は精霊達に向かってどなり声を上げ、癇癪を起して魔法を発動させてた。
・・・でも精霊達が見えない彼らにとってはどう見える？
何もいない空間に向かって、怒鳴りつけて、・・・少なくとも、普通の人間が打てないような上級魔法を何もない空間に発動させてる頭が沸いてる女？？？？

・・・・・わーお。文字にしたらかなりイタくない？？
私だったら無視する。なんか変な人がいるなー程度で、レッツスルーだ。
だってなんか巻き込まれちゃいそうだし。
その痛い人って思われるのが私ってのが問題だけど、まぁ、そこら辺は置いとく。

今更人間になんと思われようと痛くも痒くもないし良いよ。うん。
いい。
でも私の精神的な健康上にはよろしくない。
あぁ・・・さっさと去ってくれ。なんと思われていようといいから、早め早めに私の視界から消えてくれ。
大丈夫よ、今度からはこれを教訓に気をつければいいんだから。
むしろ、街中やら国のど真ん中でやらかさなかった辺りまだマシよ。
うん、マシ。マシだと思え、私！
あまりの羞恥に顔を両手で覆って、私という怪しい人物から彼らが遠ざかってくれる事を切々と願っていると

「信じられない・・・！！」

という誰かの声が聞こえた。
そんなに私が珍しいか。誰もいない空間に向かって上級魔法を炸裂させていた私という変人が。
存在までも信じられない程に？いや、別にイイケドサ。

「お気になさらず素通りでどうぞー・・・」

小さく呟いてみるが、聞こえてるかどうかは甚だ疑問だ。
あーあ、穴でも掘ってしまおうか。んで、しばらくそこで暮らすのもいいかもしれん。
今度は５００年と言わず１０００年くらいさ、寝ようか自分。
この羞恥が薄れる頃に出てくれれば言いんだｓ

「今の時代に精霊と会話できる人がいるだなんて・・・・！！！」

って・・・・・・・・ハイ？？？
あんだってぇ？？？？
頼むもう一回言ってくれ。

私のぐちゃぐちゃ思考の隙間に這いこんで来た声はなんとも澄んでいました。まる
おぉう、イケメンボイスーなどと場違いにも考えてしまったのは立派な現実逃避だ。
なんだってこんな面倒なことに・・・と冷静な自分が頭の隅っこで呟いていたが、そんなのは今更だ。
この世界に召喚された時点で面倒事など起こりっぱなしなのだから。
予想外の発言に、あれ？この人この世界にいる数少ない「見れる人」

の内の一人なの？？と馬鹿みたいに戸惑う私。
見えない事で誤解される事により感じる羞恥心と、見える事によって訪れるかもしれない厄介事。
どっちが私にとっては面倒なんだろうか。

・・・後者だな。間違いなく後者だ。
誤魔化せ、誤魔化すんだ私。
頭がおかしい子を装うんだ！
もう一回なにも無い空間に魔法をぶっ放して「おのれ、魔王め！私が成敗してくれる！」とか何とか言えば、きっと相手も遠ざかってくれる！！

「すみません、是非お話を・・・」

「だが断る！！」

即座の否定後、ハッとして口を覆っても時はすでに遅い。
誤魔化す事も忘れて相手の発言に素直に反応してしまうとは何事か。
しかもノリで。
後悔先に立たずとはまさにこの事。

「ルガ！！！！」

猫の手も借りたいこの状況に迷わずアッシー君第二号を召喚した私は、召喚陣を伴って現れた巨大な狼の背中に即座に飛び乗る。
誤魔化すとかもうどうでもいい。逃げろ私。世界の果てまで。

「何処でもいいから、人のいないとこに行ってぇ！！」

なんとも無茶苦茶である。
なんだろうな、この展開・・・・と思わなくもないけど、それも今更だ。

私の指示に遠吠えで答えたルガは、強く地面を蹴って走りだした。

逃げるが勝ちってホントかな（後書き）

・・・・・なんだろうな、この展開。は私のセリフだwwwwwwwちょ、どうしてこうなったwww

この世界にも厄日の概念ってあるの??（前書き）

連続であっぷ～
文章の長さも頑張った方だと思う（ °∀ °）！！
頑張ったよ！ほめて、ほめて！！！↑

修正。１／１３
姫ちゃんが誘拐されている間のルガの行動を挟み込みました↑

あ、それとお礼を言わせてくださいゞ（＊´∀｀＊）ノ
皆様のお陰でＰＶが２６，７７０アクセス、お気に入り登録が２９１件になりました！！

しかし、それにしても何でこんな小説が・・・（；　・、ω・´）
ゴクリ

この世界にも厄日の概念ってあるの??

私を乗せて走ってくれたルガは私の要望通り、人のいないところを目指して駆けてくれた。
駆けてくれた・・・・のは良いのだが。

「うーん・・・・。私的には人間的な生き物全般のいない場所って意味だったんだけどねぇ。。。」

どこか天然要素のある我がアッシー君二号はそのド天然さを発揮して、とある国に連れて来てくれた。
見た事もないし聞き覚えもない国名からしてあの戦争からの５００年の歳月の間に建国された国であろうことが伺える。
勿論、国だから国民がいる。
でも、それは人間ではない。

・・・・じゃあ、何が住んでいるかという話になるのだが。

この国に住んでいるのは一般的に「獣人」と呼ばれる種族になる。
獣人にもいろいろと居るのだが、ここでは一括りで纏めて説明させて頂く。面倒だし。
この世界的認識では当然の如く人間ではない・・・が、姿形は人間に耳やら尻尾やら羽が生えたものでしかないのだ。
ぶっちゃけ、私に言わせれば人間とあまり変わらない、ということ。
国を治める王が獣人なら、国を護る騎士団も全て獣人。国民もぜーんぶ獣人。

人間は入国不可！・・・・という訳でもないのだが獣人は人間を恨んでいる傾向にあるらしく、ここに不用意に人間が入れば袋叩きにされてしまう・・・・かもしれないんだとか。これ、レディ情報。確かにこれだったら人間はいないだろう。ルガは間違ってない。うん、私の言葉を馬鹿正直にそのまま実行に移しただけだもんね。それでちょーっと私の考えの斜め上方向に行っちゃっただけで。

さて、この獣人という種族だが、
人間に比べて運動能力やら見かけが優れている傾向があるせいで、昔（私が（起きて？）いた頃）は奴隷として扱われることが多かった。
なぜ、優れている獣人が奴隷と言う立場に甘んじていたかというのもとある精霊魔法のせいだったりする。
その精霊魔法というのが本来は幻獣や、神獣と契約をする際の補助に使うものだったのだが、どこでどうひん曲がってしまったのか、とある魔術師がその精霊魔法を元に「獣人を縛る」魔法を開発してしまったのだ。
あの頃の精霊は良くも悪くも純粋で、人の営みに関してはかなり無知だった。
しかも、下位精霊だ。何が良い事で何が悪い事か等知る由もなく。。
魔術師に請われるままにその魔法を獣人に発動してしまい、気付けば獣人は全世界で奴隷として良い様に扱われるようになってしまっていた。
私が召喚された頃なんかは、それはもう酷い状態で獣人からすれば地獄でしか無かっただろう。
男の獣人は戦争や雑用にこき使われ、女の獣人は人間に比べれば見目が良いのが多いのが災いして性奴隷として酷い扱いを受けていた。
あぁ、懐かしい。召喚されたばかりの頃、全てに抵抗しまくってい

た私は暴走の中でその現状に吐き気を覚え精霊達を癇癪ついでに八つ当たりのように怒鳴り飛ばしたのだ。
「無知な事は罪と知れ。知らないからと言ってこんなことは許されないんだ」と。確かそんな事を言った気がする。
今思い出してみると、なんか芝居がかっている気がする、ハズカシイ。
・・・・暗黒の記憶だな、よし、封印しとこう。

まぁ、とにもかくにも。
言われるがままだった精霊達を怒鳴り飛ばして、ついでに獣人を慰めやらに使用している私を召喚した国の阿呆共もぶっ飛ばして、私は奴隷たち全てを解放した。
二度とその精霊魔法が使われない様に、精霊達にキツク言い渡し、ついでに「呪文を唱えたら唱えた人間の一族ごと滅ぼす」と全人類に向けた脅しもかけた。
いやぁ、あの頃は若かったな、私。生かしてやるなんて優しすぎでしょ。

・・・・閑話休題。話思いっきり逸れたなぁ・・・。
ルガが連れて来てくれたのは、そんな獣人達の国。
確かに、自分たちを良い様に利用していた人間なんかの国に居たくなんかないよねー。
うんうんと頷いてしまうのはとても他人ごととは思えないからだ。
ちなみに、そんな獣人の国と人間の国は険悪で戦争中・・・・と言う訳ではないそうだ。
またまたレディ曰く、獣人達の国のトップは「人間と争うのも馬鹿馬鹿しい」という考えらしい。
大人だなーと感心せずにはいられない。

―くぅぅぅん・・・・―

項垂れて背中を大きく丸めているルガを撫でながら私はつらつらとそんなことを考えていた。
私の「お願い」を上手く叶える事が出来なかったのが悲しいらしいルガはずっとこんな調子で話しかけても「くぅぅぅん」としか言わないのだ。

「ルガ、そんなに落ち込まないで。」

ぽんぽんと背中を叩いて慰めてみるが相変わらず浮上する気配は無い。
私の言葉が足りなかったのが悪いのであって、ルガは全く悪くないのだけどねぇ。

「あの痴態を見ていた人たちから遠ざかれれば何処でも良かったのよ。だからルガ、そんなに気にしない気にしない！」

―くふぅん・・・・―

駄目だ、これは。。重症だ。
どれだけ慰めて見たところで、ルガは結構頑固なのでしばらくは浮上しないだろう。
早々に諦めた私はルガを見守ることにして（還すのもアリだが、一人は何となく嫌なので）、獣人の国に入国する事に決めた。
獣人達は人間に比べれば全然まともだ。
喧嘩っ早い・・・という難点もあるがそれには個人差があるし、質の悪さから言えば人間の方が扱いづらいだろう。

「さって、入国できるかなー？っと」

奴隷から解放された獣人達が作った村に私は獣人の救世主として出入り自由だったのだが、しつこいようだが５００年だ、５００年。自覚は無いが現実、私の常識は５００年前のものだ。通じるのか？・・・・・・通じないと思うんだが、どう？？

―きゅうん？？―

私の自問自答にルガが何？と言わんばかりに不思議そうに首を傾げている。

気にしなくていいよー。と伝える為にわしわしと首元の柔らかい毛を撫でてやる。

悩むだけ無駄だ。

行ってみて追い返されるなら素直に下がればいいし、入れたら入れたでご飯食べて宿とって寝ればいいし。

困る事は特に無いし、入国できても出来なくても問題はない。となれば特攻あるのみ！よね。

○

・・・結論から言おう。

入国は出来た。でも、問題は大有りだった。

というか、問題しか無かった。なんぞ、この状況は。。。
こんな事になるなら追い出された方がまだマシだったと思う。贅沢せずに野宿すればよかったと激しく後悔。
私は「はふぅ・・・」と溜息をつくしかない。
目が覚めてから一日しか経っていないというのになんだというのか。厄日か？そうか厄日なんだな？？？？

精神の安定の為に落ち着いた風に傍らに佇むルガを力の限り抱きしめる。
全力で抱きしめているというのに、ルガは苦しそうな素振りを欠片も見せない。むしろ嬉しそうに尻尾をブンブン振っている。
癒されるよ、るーちゃん。とゆうか、アッシー君達だけなのかね、私の味方は・・・。

今のこの状況、私には理解不能だ。
だって、12～3人程が私とルガを囲む様にして跪いてるんだよ？？
そう、跪いているのだ！
・・・大事な事だから二回言いました。

どうしてこうなった。いや、むしろこうなるべくしてこうなっているのか？？

「ようこそお越しくださいました、我らが救世主（メシア）」

そう、跪いている獣人の一人が言う。丸い耳にふわふわの金髪と尻尾。多分、獅子の一族かな？
・・・・てか、何所かで聞いた事のあるセリフだなーと思ったらあれだ、召喚直後にあのいけすかないベリオ王国の王に言われたセリフにそっくりだ。

おっけー、わかった。これは嫌がらせなんだな？
獣人の国を滅ぼしてしまえ☆という神のお告げなんだな？？

『そんな事言ってなっ・・・』

レディの声が頭に響いた気がするが華麗にスルーだ。
勝手に頭の中で喋ってんじゃないよ、カスが。
どいつもこいつもホント、良い根性してる。許すまじかな。
それにしても召喚されてから今まで良い事一回でもあった覚えが無いのだが。
いや、多分あっただろうが嫌な事がそれら全てを掻き消してしまっている。
なんか、自分が不憫すぎて泣きそうだ。

怒りにふるふると身体を震わせる私に気付いたらしい獣人達が慌てたように何が悪かったのかを尋ねてくる。
何が悪かったかって??全部だよ、ぜ　ん　ぶ　！
入国手続きの直後攫うようにして城にまで連れて来て置いて「何が悪かったか」等と聞いてくる奴らの神経が知れない。
抵抗しようにも、頭の中でレディが『待って！ちょ、待って！！話聞いてあげて！！』等と喧しく頭の中で話すもんだから滅ぼ・・・失敬、抵抗する暇も無かった。
あ、なんでレディの声が聞こえるかっていうと、私の物騒な考えに勘付いた獣人を気に入っている彼女が私を止めようと躍起になって念話を飛ばしてきたからだ。
獣人の頭に生えた獣耳やら尻尾がツボなんだって。・・・正直知ったこっちゃないよ、そんな事。

ちなみに、私が誘拐もどきを食らっている間ルガは私を抱き上げた

（細かく言えばお姫様抱っこ）獣人の横を並走するだけだった。
だいぶ昔にした、危害を加えるつもりのない相手を勝手に攻撃しないことという私の指示を律儀に守ってくれているらしかった・・・のだが。
あまりの驚きに硬直して声が出なかった私も私だが、ルガよ、今更だけどこう、もうちょっーと柔軟性というものをもってくれないだろうか？と思ってしまう私は贅沢なんだろうか。

・・・・閑話休題。
念話でのレディの話によると私を散々利用した人間が大嫌いな神々だが、獣人は別なのだそう。
基本なんにでも愛され体質な私に獣人は優しかったからね、多分そのせいだろうと思う。
人間は俗物的な思考がかなり強いが、神獣の血をひく（という伝説がある）獣人達は神獣程ではないにしろとても純粋で誠実だったから少なからず私も信用してたし。

でもそれも結局は５００年前の常識だ。
５００年後の獣人はその範疇では無いらしいな、と残念に思いつつ全力の抵抗をしようかと魔力（マナ）を集め始めたところで『だめぇぇぇぇぇぇぇぇ！！』というレディの叫びが頭ん中に轟く。
・・・・・この声が聞こえるのが私だけ、というのはあまりにも酷い仕打ちだと思う。おい、誰かこの苦しみを一緒に分かち合え。

「・・・・・五月蠅い、ホントに」

ポツリと口をついて本音が零れた。ちょっと黙っててくれるー？？
とレディに対してちょっとばかし本気の殺意が湧いた。
私の呟きは極々小さいものだったのだが耳の良い獣人達には充分な声量だったらしく、ビクゥッ！と跪いたまま彼らが身を竦ませる。

呟きはレディに向けてのものだったのだが、黙ってくれたなら丁度いい。

状況・・・・説明して貰いましょうか？？？？

この世界にも厄日の概念ってあるの??（後書き）

ちなみに、
姫ちゃんの愛され体質は人間にも有効ですが人間は欲にまみれている為、強大な力を持つ姫ちゃんを我が物しつつも良い様に利用しようと躍起になるんですねー
なので姫ちゃんにも姫ちゃんを愛するあらゆる者達にも基本嫌われております。。

勿論、そんな人間ばかりな訳ではないのですが姫ちゃんに近づくものはみんなこんなんばっかりだった為、今では人間と言う種族丸ごと神様やら精霊やらに嫌われてます。
連帯責任ってやつだぁね。。

誤字脱字、文章の矛盾点などに気付かれた場合はご連絡お願いいたします。
あーんど
感想頂けたら励みになりますので是非お願ｒｙ←自重ｗ

あ、あと。。
お気に入り登録が３００件突破したらお礼になんか閑話をいれようかなーと思うのですが、どうでしょうか??
是非ご意見を頂ければと思うのですが・・・・どうでしょうか???
詳しい事は活動報告にて書かせて頂きますので、よろしかったらそ

っちも見て行ってください┐●））ぺこんちょ

うなじは乙女の絶対領域の一つだと思うの（前書き）

サブタイトルに深い意味はありませんｗｗ

そんでもって、更新遅れてスイマセンｏｒｚ

仕事が忙しくてなかなか更新できなくて・・・。。（。´Д`。）

。。

しかし。。

書いている間に何を書いてるのか分からなくなるという不思議―ω・`）

明日ぐらいに読み返して書きなおします、ハイ。。。。。。

うなじは乙女の絶対領域の一つだと思うの

むかしむかし、じゅうじんたちはにんげんにどれいとしてひどいあつかいをうけていました。

おとこは、せんそうにかりだされ

おんなはぼうりょくをふるわれていたのです。

すべてのじゅうじんはいきることにつかれ

ただ、いいなりになるひびをすごしていました。

そんなぜつぼうがじゅうじんたちをつつみこんでいたころ

あるひ、せいじょさまがあらわれました。

そのせいじょさまはうつくしいぎんいろのかみに

すんだあおいろのめをもつ

せいれいさまとかみさまにあいされたそんざいでした。

ぎんろうのおうと、ふるきりゅうをしたがえたつよくやさしいせいじょさまは

じゅうじんへのひどいあつかいをしるとなげきかなしみました。

そしていいました

「なにもしらないということはなんとつみぶかきことか。

じゅうじんはしんじゅうのちをひく、けだかきものたち。

にんげんがいいようにあつかっていいものたちではない」

と。

そしてにんげんからじゅうじんをかいほうし、じゅうをあたえてくれたのです。

だからじゅうじんはせいじょさまをかんしゃをこめてこうよびます。

「救世主（メシア）」さま・・・・と。

○

獅子族の男から渡されたこの世界での所謂「ひらがな」ばかりの子供向け絵本をぱたんと閉じて私はヒクヒクと頬を引きつらせた。
・・・一体誰の話だ、これは。
銀色の髪に蒼色の瞳。私と似通った点はあるにはあるが、あえて言おう。それも、声高だかに言わせてもらおう！！

・・・・コレ、絶対私じゃない！と。

確かに、獣人を人間から解放した覚えはある。あるにはある・・・・けどこんな御大層な絵本にされるような崇高な気持ちからでは無かった。
正直言って八つ当たりで起きたに過ぎない事だし、意図的に助けた訳ではない。
獣人解放はハッキリ言って、オマケだ。私の八つ当たりに勝手に付随してきたオマケ。
・・・・しかも、なに？あの「女神様」の発言。
あんな事言った覚えないし！しかもなんか厨二病チックだし。
いやいやいやいや、誰だよこの絵本作ったの！偽造しすぎだろう！！盛りすぎだろう！！！
ぜんっぜん子供向けの絵本には向かないぞコレ！

しばらく女神様が獣人達を解放するページを魂の抜け出た状態で眺めていた私は、無意識に絵本の表紙の「めしあさまのものがたり」というなんとも分かりやすい題名の下の作者名を確認した。と、同時にガックリと肩を落とす。
そこには「ロード・レドリア」の文字。

・・・・・・・・覚えのありすぎる名前に本当に魂が昇天する思い

だった。
なにしろ私の知り合いの中にロード・レドリアという男が存在するのだ。
猫の一族の黒い耳と尻尾を持っているしたたかな性格をしている男で、いつも私に「好きだ」と言って憚らなかった物好きの一人で、しかも、こういうことしそうなヤツ。

だから、もし私の知っているロード・レドリアとこの絵本の作者が同一人物なのであるとするならこの絵本の内容も頷ける。
・・・十中八九本人だろうけど。
彼は私が嫌がる事をするのが大好きで、よく何かしらの嫌がらせ（彼曰くいたずら）を仕掛けてきていたのだ。
私が本当に嫌がるような事はしないし、根本的には良い奴だったので私も本当の意味で彼を嫌いになることはなかったのだが・・・・・・
まさか５００年経ってもなお私に対して嫌がらせをしてくるとは。。。

しかも、今までの嫌がらせの中でも一、二を争えるほどにインパクトがあるものをｗｗ

出会ったあの時に躊躇わずに殺っておくべきだったか？
あまりの仕打ちに身体が一層大きく震えるのが分かった。
今はいない（獣人の寿命は長いものでも大体が６０年程だから）彼が目の前にいてくれたらよかったのに心底思った。
目の前にいてくれたなら・・・・・・全力で痛め付けてやったというのに。

というか、どいつもこいつもやり逃げにも程があると思う。
・・・・いや、ほんとは勝手に５００年もの長い時を眠ってたのは私であって、彼らはその間に決して抗うことの出来ない「死」というものによってこの世から去らざるをえなかった・・・・というの

は分かっているのだ。。
あぁ、私は何を言ってるんだろうな。頭の中がミキサーで掻き混ぜられたかの如くグチャグチャなのだ。

「そこの獅子の一族のアンタ。」

「は・・・・ハッ！」

「悪いけどこの絵本の女神様は私じゃないわ。期待させて悪かったわね。」

・・・・ということでしらばっくれる事にしてみた。
口八丁手八丁。女優な私には余裕余裕。大丈夫、頑張れ私の表情筋。
彼らが勘違い（いや、助けた事はホントのことだけど）している理由は髪と瞳の色、あとはルガが原因であろう。
ウン、ダイジョウブ。なんとか逃げ切れる・・・と期待したい。

「ですが、貴女様は伝承にある通りのお姿です！！」

「髪と目の色の事？確かに珍しいかもしれないけど、無い色じゃないわ。」

そんなことで断定されても。と苦し紛れに言おうとして、「それだけではありません！」と遮られる。
あぁ・・・・嫌な予感。

「伝承によると、その女神様の項（うなじ）には神を表す紋章があると言われています。貴女様の首にもありますよね・・・？」

・・・・アリマスヨー。

ここまで連行される間になんか首触られてるなーとは思ってたけど、まさかそれを確認するためだったとは。
私の髪は長くて背中まであるから基本的に紋章は人の目に入る事は無いし、私自身、自分で紋章を見る事はほぼ無いからすっかりその存在を忘れていた。

私の項（うなじ）にあるのは、創造神であるクロノスの愛娘であるものを示すもので、簡単に言ってしまえば翼の生えた十字架である。
まぁ、すんごい綺麗な刺青×１００倍くらいのものを想像して貰えば手っ取り早いと思う。
愛娘と言っても、ホントの娘なわけじゃないんだけど。
それほど大事にしてますよーっていう目印ってだけ。
つまりは、私に手を出せばクロノスに手を出したも同義・・・ということなワケ。

ちなみに言うと、私からすればクロノスは過保護系ほのぼのパパな性格の持ち主だったりする。
地の精霊神であるグランも似たような性格の持ち主だからこの二人はとても仲が良い・・・ってアレ？何の話してたんだっけ？？

―くぅん・・・―

ツンツンと突かれて、ハッと目が覚める。
マジで現実逃避してたっぽい。戻って来い、ワタシ。
心配そうに見てくるルガを撫でくり回した私は、もう何だかいろいろと考える事が面倒臭くなってきていた。
もーね、投げやりになっても良いと思うんだ。訳分かんないし。

・・・・・と、いうことで

「パパー！！！！！」

この世界で一番の創造神、クロノス召喚。

うなじは乙女の絶対領域の一つだと思うの（後書き）

訳分かんなくなったのは姫ちゃんじゃなく、あ　た　し　☆

（´Д｀ヽグスンッ

何を書いてるのか分かんなくなってきますたw

ちょっと待って、整理しようかワタシ！なノリです、、、、

そしてクロノス召喚。。

パパーという言葉で召喚されちゃうんです、ハイ

感想、やら指摘などどんどんお願いします。

あんまり辛辣だと心が折れます。ぽっきりいきます（´；ω；｀）

暴走の果てに（前書き）

大変遅くなりました！！
言い訳はしませんがとりあえず一言。

ＰＣぶっ壊れるとかどういうことー！！！！！！

再開一話目が他者視線でモウシワケアリマセンｏｒｚ
いきなり姫ちゃん視点で書くのは難しかったのですグスン

バックアップの大切さを知ったよ・・・・・・・・＿＿「＿＿○

調子が戻っていない上に一発書きです。
後で読み直して、場合によっては訂正をかけますのでご了承ください

あ、あと遅くなりましたが
あけましておめでとうございます！

１月１４日　０：０１にサブタイトルを変えました。
書く予定だったのとは違う中身を書いたのに、タイトルはそのまま
という・・・ね

暴走の果てに

唖然、茫然、愕然。
そんな言葉がぴったりなんじゃないかと思うほどに私の頭の中は真っ白だった。

＊

門を警備しているものから連絡を受けた時は私は半信半疑だった。
何しろ、「神狼を連れた白を帯びた銀髪青眼の美女が入国手続きをしている」というものだったから。

その特徴を聞いて救世主（メシア）をイメージしないものなどこの世界にはいないだろう。
この世界には、白銀の髪や蒼い瞳を体に宿す人間は一人しか存在しない。髪の色とされるその色は救世主（メシア）だけの色だと決まっているから。
くすんだ銀を髪色に持つ者や青っぽい暗い色の瞳を持つ者なら確かに数えきれないほどに存在するが、その場合は灰色や黒などと表現され、白銀や蒼などと同等に扱われることはなかった。

だからこそ私は、伝達に来た兵の言葉を信じてはいなかった。
たまにだが救世主（メシア）に扮した人間どもが我が国に潜入しようとこんな戯言を吐いて入国しようとしたこともあったので、今回もそれの類だろうと捨て置こうともした。
だが、なぜか気になって。
ふらりと、門まで行った自分を

・・・・・私は全力で誉めてやろうと思う。

入国審査室に居たのは、澄んだ白銀色の髪と深い蒼の瞳を持つ見たものの眼が潰れてしまうんじゃないかと心配になってしまうような美少女と美女の中間のような少女だった。
すらりとした体躯に、今までに見たこともないような整った顔立ち。神などというものは今まで見たこともないが、なるほど、これが神様かと納得しまえそうな圧倒的な存在感。
どれもこれもがどんな生き物からも逸脱していて、横にいる神狼が霞んでしまうほどだった。

そこから私の行動は、・・・まぁ、誉められたものではなかったと自分でも思う。
椅子に座って手続きをしていた彼女を畏れ多くも抱き上げて城まで誘拐犯よろしく連れて行ってしまったのだから。
その時の私は兎にも角にもこの聖女を城まで招待せねばということしか念頭になく、幼いころから学んでいた身に染みついたはずの優雅な身のこなしや言葉遣いなどもどこかに飛んでしまっていたのだ。

未だに姫からはからかい交じりにあの時のことを言われるが、その度に私の気分は地の底にまで落ちてしまうのだ。
何度後悔してもしたりない。姫を抱き上げた瞬間のあの自分をぶん

殴って罵ってやりたいと思うくらいには、私にとってあの時の記憶は黒歴史といってもいい。

・・・閑話休題。今の私が思っていることなどどうでもいいか。

そんなこんなで、情けなくも動揺していた私だったがどこか頭の中は冷静だったのか彼女のうなじを確認することは怠らなかった。

「救世主(メシア)のうなじには神の紋章が描かれている」などというのは誰もが知る常識であったから自分としては当然のことを確認したと当時の私は思っていたものだ。

姫曰く

「抱えられたままうなじをじろじろ見られてあん時は恥ずかしかったわー。あの時のレオの視線超怖かったし、すごい変態ぽかったよ？」

らしいのだが、その時の私にはもちろん自覚などないぞ？

・・・また話がそれたな、昔の話を続けようか。

彼女のうなじには当たり前のように神の紋章があって、私は内心で狂喜乱舞した。

髪の色や瞳の色はごまかせても神の紋章はごまかすことなどできないからな。

神々しく七色に光る紋章は有名なあの「めしあさまのものがたり」に描かれていた形通りだったが、その数万倍数億倍も美しいものだった。

今まで出したこともないんじゃないかという速度で城に彼女を連れ帰った私は興奮冷めやらぬまま、彼女を城の謁見室まで連れて行き、玉座に座らせ一緒にいた宰相などとともに跪いた。

馬鹿みたいな話だが本当のことだ。

私がこのとき何を考えていたのかなどということは、今の自分でも知りたいくらいだ。
ただ一つ言えるのは、本当の本当に私は大混乱していたということだけ。
彼女のその時の様子はまったくもって覚えていない。思考回路はパンク寸前だったから、言ってはなんだが他人のことを気に掛ける余裕などなかったのだ。

「ようこそお越しくださいました、我らが救世主(メシア)」

彼女が救世主(メシア)であることは私の中ではすでに揺るぎない真実の一つとなっていたから、そう口上を上げて、やっとこさ私はそこで冷静さを取り戻そうとした。
取り戻そうとしただけで冷静とは到底程遠い状態だったが。

「・・・・・五月蠅い、ホントに」

だからそうぽつりと呟かれたときは心臓が止まるかと思った。
いや、正直に言おう。彼女から紡がれた声音に心臓をがっちりと掴まれてしまったのだ。
言葉の内容など、聞いていなかった。
ただそのかわいらしく綺麗な声だけが頭の中に響いてしまって、条件反射のように体が反応したのだ。
どこがとは言わない。察してくれ。

彼女はしばらく沈黙した後、私に向かって「救世主(メシア)って何?」と尋ねてきた。
正常に働いていなかった頭は彼女の問いかけの意味を深く考えぬままに、私を脱兎のごとく書物室まで走らせた。
救世主(メシア)を知らないだと!?となんだかもうよく分からない思考に陥

っていたのだ。
この世界の住人が一度は読んだことのある絵本を引っ掴み彼女のもとへと走って戻るまでの間、約数十秒。

・・・・そんな目で見るんじゃない。
お前が何を言いたいかはわかっている。
分かってるから何も言わずに話を聞け。

私から絵本を受け取った彼女は、絵本をしばらくパラパラと捲ったのち、何を思ったのか表紙を確認して諦めたような表情になった。
はぁ・・・と深いため息をついた彼女はそれはそれは美しく・・・・
っていや、なんでもない。

そこからは、まぁ、押し問答というか。
「私は救世主(メシア)じゃない」と言い張る彼女と「あなたは救世主(メシア)に違いありません」と押し迫る私とで場はこう着状態となった。
王子である私と救世主(メシア)とされる少女との言い合いにはさすがの宰相たちも口を出せずにいたらしく「違う」「そうに違いありません」「ちがう！」「違いません！！」の出口の見えない押し問答が続き、揚句には心配したらしい神狼が

―くぅん・・・―

と鳴きながら彼女の体を優しく突き、次いで私のことをギロリと睨み付けるという結末に終わった。
彼女に向ける視線とは全く違う冷たく燃える眼に、ギクッと体が固まり黙り込む私。
この時になってやっと私は自らの行いを反芻できるほどに冷静になれたわけだが時はすでに遅く

あーもう！！めんどくさい！！となにやら頭をかきむしった彼女が

「パパー！！！！！」

と叫んだその数瞬後に現れた存在に

真実、心臓が止まった。

暴走の果てに（後書き）

実は獅子族のこの方こんなキャラでしたよーって話。
次の話はいつになるかな・・・そんな遅くはならないハズ・・・・・
と思いたい（，・ω・、）

民主主義って大事だよね（前書き）

超短いです！すいませんｏｒｚ

そんでもってまたもや一発書き

何も考えずに姫ちゃん（とクロノス）の暴走を書き連ねたので文章がグダグダかもしれません

明日にでも（って、もう今日か（，；ω；、））読み直して訂正かけますのでご容赦ください！！

姫のキャラというか喋り方とか考え方を忘れてしまってなんか別人になってないかがすごい心配ですｗ

民主主義って大事だよね

創造神、クロノス。
その存在は至高のもので最上。
この世界においてもっとも尊い存在である・・・・とされているのは、まぁみんなも知ってると思う。

世界神ゼロフトや三大神と呼ばれる生命の神ジェイルや運命の神キルア、時間の神クオーツを生み出したのもクロノスと伝承で言われていることから、その偉大さは計り知れないものである（とこの世界のもの達から思われている）ことは簡単に伝わると思う。
まぁ、実際に世界神やら三大神やらを生み出したのはクロノスだし強(あなが)ち間違ってはいない伝承なんだけど。

・・・・私から言わせればこの伝承、装飾しすぎもいいところである。

長ったらしくこの世界の創世記を語っている聖書やら先代たちの書物なんかを読むとどれもこれもクロノスと言う存在を美化しすぎていると私は思うのだ。

『優しく我らを見守ってくださっている創造主様は、慈悲深く愛情に満ち溢れた最高の存在である』などと書かれているその書物たちを読むたびに私は、反吐が出る気分だった。
誰も本神(ほんにん)を知らないからそんなことを言えるのだ。

・・・・私??

勿論知ってますとも。
というかむしろ、知りたくもないのに知らざるおえない立場ですからね！！！

っと、閑話休題。
今はそんなことどうでもいいか。捨て置いといてちょーだい。

兎にも角にも、クロノスという存在はこの世界の人々が思っているような存在ではないのだ・・・ということをまずみんなには念頭に置いておいてもらわなきゃいけない。

じゃないと、そう
・・・・彼の命が無駄になってしまうから。

＊

「命を賭して、クロノスの危険性をみんなに教えてくれた君に敬意を示そう！」

『ちょ、何言ってるの！？だめぇぇぇぇぇぇぇ！私のお気に入りのレオくん！レオくんがぁぁぁぁあああ！！』

「王子！レオ王子！！！」

「だれか医者を！医者をここに呼べぇぇぇぇぇぇ！！」

「おい！息をしていないぞ！心の臓も動いていない！」

「だれか！だれかいないのか！！」

まさしく阿鼻叫喚。
ちなみにいうと、泣き叫んだり慌ててたりするのは未だに念話を飛ばしてきているレディと宰相さんと騎士さん達だけだったりする。
私？私は後ろから羽交い絞め状態だ。痛くない程度の力しかかかってないはずなのに身動きは一切不能。

第三者的立場で傍観してみればなかなかに面白くもある大混乱ぶりであるが、一応第三者ではない・・・というかむしろ当事者なのでさすがに笑えない。
誰だ、こんな空気にしたのはと犯人（クロノス）を睨み付けるも、彼は彼で

「姫、姫、やっと目が覚めてパパは嬉しいぞ！」

などとアホみたいに私の頭に頬ずりをしてきている。
キモイとかウザイとかが頭の中を過るが残念なことに私は身動きが全く取れないので、ぶん殴ることもできない。
腐っても創造神、ということであろう。つまりは、私以上になんでも有な存在というわけだ。

って・・・・・え？状況がいまいちよくわからないって？
しょうがないなー、優しい私が分かりやすく説明してあげよう。

私
混乱の末に創造神クロノス召喚。
（パパ呼びというおまけつき。）
←
クロノス

久々に目覚めた愛娘(わたし)が珍しくも自分を頼ってくれたことに歓喜(ぼうそう)
（パパと呼ばれたことが更に暴走を加速させたようにも今なら思う）
←
クロノス
調子こいて愛娘(わたし)の敵と思われる獅子族の男に向かって呪いを発射
←
獅子族の男
心肺停止
←
クロノス
愛娘(わたし)を自分の腕の中に閉じ込め一人ご満悦
←
今、現在

とまぁ、こんな感じかな？？

・・・なんだろう、文面にしてみると悪役はどう考えてもクロノスでしかない気がするんだ。
しかもなんでだか、こう、私の胸の中に「罪悪感」という名の感情がじわじわと広がっていくというか。

こんな世界なんて大嫌いだし、憎い。滅べばいいと思うし、滅ぼしてしまえとも思う。
でも、獣人達は私のことを大切にしてくれたし、何より優しかった。
暴走して荒んでいた頃の私に優しくしてくれたのは、人間に蔑ろにされていたはずの彼らだった。
私も人間なのに、彼らは無償で優しさと労りをくれた。
だから正直言って、彼らのことは嫌いじゃない。感謝こそしても嫌いになることなんて出来やしないのだ。

・・・けど、彼らはこの憎い世界の一部分でもあるから好きにはなれない。
だって、この世界にあるものすべてが私は憎いから。
私という存在を代償に今あるこの世界に生きているすべてのものが憎いのだ。
何も知らないくせに、笑顔でのうのうと暮らしているのかと思うと虫唾が走る。

でもやっぱり、この世界に生きる精霊や獣人、神獣達は嫌いになれない。
悲しいときには一緒に泣いて、楽しいときには一緒に笑った存在だから。

・・・・でも、だって、だけど。
そんな子供の言い訳みたいなつまらない文章が頭の中を永遠と回りつづける事に自分で自分に苦笑を漏らす。
どれだけ考えたところで答えを出せないのだから意味はないのだけど、どうしても考えてしまうのだ。
後悔したくないから。もう、苦しい思いをするのはたくさんだから。
最善の策は何かないのか、悔いを残さないにはどうしたらいいのか。

・・・結局のところ、自分がどうしたいのかなんて事は一生分からないのかもしれない。

滅ぼしてしまえと思うのも本当なら、獣人達に死んでほしくないと思うのも本当。
厄介事からこれで逃れられると思いもするが、目の前の獣人が死ぬのは嫌だと苦しみもする。
最善の策なんてものは人生には一つもないのかもしれない。

後悔しない人生なんてものが存在しないように。まぁ、私に限って言えば後悔しかないような人生だった気もするが。

本当に、人間の感情というのは厄介なものである。
自分ではどうも決めかねる。どうにかしたいけどどうにも出来ない。決めかねる・・・なんて偉そうな言い方どうかとは思うが、今この状況をどうにか出来るのは私しかいないのだし、細かいことはこの際気にしないことにして。

ぐっちゃんぐっちゃんになっていた思考という名のある種の出口のない迷路をぶった切った私は、どこか悟った気分で

「多数決とりまーす」

などと、最早覇気の欠片も存在しない声音で空気の読めない発言をかましていた。

民主主義って大事だよね（後書き）

こんな文章を読んでくださってありがとうございます；ｗ；

なんかホントこんなんですいませんｏｒｚ

未だにリズムが戻らないというかなんというか

読みづらいぞーとかここちょっと意味わかんないんだけど・・・とか矛盾見っけ！！とか言うのがありましたら是非ご指摘ください｜｜｜○

改善させていただきます！！！

あ、誤字脱字などの指摘もできればお願いしｒｙｒｙ

感想が栄養素！

書いていただけた分だけ執筆速度がＵＰ！・・・するかも？？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3480t/

ウソとホント(仮)

2012年1月15日00時51分発行